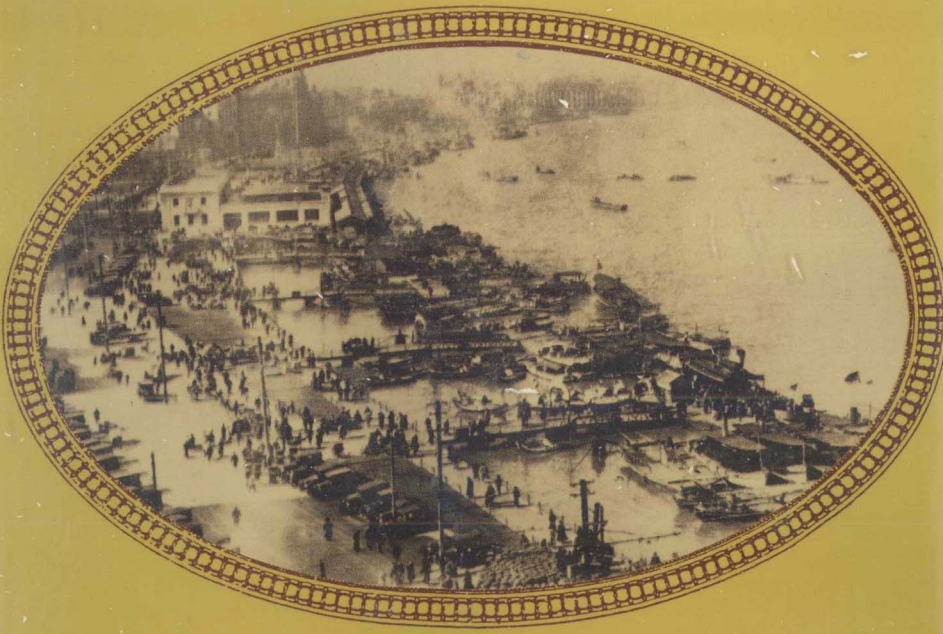
魔都上海
オリエンタル・トパーズ

山崎洋子



ORIENTAL TOPAZ

集英社

魔都上海
オリエンタル・トパーズ
ORIENTAL TOPAZ

山崎洋子

集英社

魔都上海オリエンタル・トパーズ

一九九〇年十月二五日　第一刷発行

著　者　山崎洋子
装丁者　三村淳
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社

〒101-50　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
編集部（〇三）二三〇―六一〇〇
販売部（〇三）二三〇―六三九三
製作課（〇三）二三〇―六〇八〇

印刷所　凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛てにお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1990 Y・YAMAZAKI　Printed in Japan　ISBN4-08-772762-9 C0093

目次

第一章　魔都の囁き　5
第二章　秘め事　52
第三章　闇からの銃弾　102
第四章　陰謀のアラベスク　139
第五章　異形の迷宮　189
第六章　トパーズの夜明け　225

カバー写真提供　森田靖郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

魔都上海
オリエンタル・トパーズ

第一章　魔都の囁き

○

昭和十三年、五月――。

丸窓に水しぶきが跳ねていた。夜の闇を背負ったしぶきは、海の底から這い上がろうとしてもがく、細い人間の指のように見えた。潮子は寝返りをうってそこから眼をそらせた。うす暗い三等船室の蚕棚ベッドに寝転がった人々を、ぼんやりと眺めた。

濁った熱い空気の中に、人の息と汗の匂い、それに汚物の臭気がこもっている。吐き気を覚えこそすれ、眠れるものではない。寝苦しいのは潮子ひとりではないらしく、船室のそこここから、かすかな呻き声や舌打ちが聞こえていた。横たわった人々の背中が、ときおり緩慢にうねる。

一等船室というのを、潮子は絵はがきで見たことがある。広々とした豪華なものだった。長崎からその船室へ乗り込んだ客たちも、いい着物に身を包んだ、みるからに裕福そうな人たちだった。だが、三等船室の客たちは、みなどこか得体が知れない。希望と絶望のはざまに立ち、途方にくれているような顔ばかりだ。

あたしもそういう顔をしてるんだろうか……何度めかの寝返りをうちながら、潮子は心の内で呟いた。

甲板へと通じている階段を、ブラウスにタイトスカートの女がひとり下りてきた。便所へでも行っ

てきたのだろう。ベッドの脇に積んだ荷物にぶつかりながら、奥のほうへと進んでいった。
突然、甲高い泣き声が上がった。ベッドから飛び出していた子供の足を、女が蹴飛ばしてしまったらしい。母親らしい女が文句を言う声と、若い女の謝る声が、最初はひそひそと聞こえていた。が、子供がなかなか泣き止まないので、女ふたりもだんだんと苛立ってきたようだ。
「ちょっとお見せ、骨でも折れたんならそれなりのことはしてもらわないと」
「冗談じゃないわよ、大げさな。足がほんのちょっと触っただけじゃないか。ほれ見な、なんともなってないじゃない」
女は子供の足をつかみ、前後左右に動かした。子供の泣き声がひときわ高くなった。母親があわてて女の手を振り払った。
「ちょっと、乱暴しないでおくれよ。なんともないったって、この子が痛がってるんだからしょうがないじゃないか。おまえもいい加減に泣きやむんだよ、このッ」
癇癪をおこした母親が、子供の頭をぴしりとはたいた。子供はよけい、やけっぱちのように泣き叫んだ。春とはいえ、船底にある三等船室は、ひどく蒸した。暑さと疲れから、大人も子供も神経が尖りきっている。ただでさえ寝つかれずにいた人々が、たまりかねて文句を言い始めた。
「しょうがないでしょ、子供が泣くのは」
母親が自分も泣き声になりながらわめいた。
「いけないのは子供じゃなくてこの女なんだから」
「親子してしつっこいねえ、ちょっと足が触ったくらいで。あんた、もしかして因縁つけてゆするのが商売なんじゃないだろうねえ」
女も負けていない。短く切り揃えたおかっぱ頭を振りたて、声高に言い返した。
「なんてことを！　あんた、なんとか言ってよう！」

その時になって、母子の隣のベッドに寝ていた男が、むっくりと半身を起こした。船室のざわめきがぴたりと止んだ。男は上半身裸だった。その背中一面に彫り物のあることが、うす暗がりでさえはっきりと見てとれた。

「なんだって娘さん、うちのかかあが、ガキをねたにゆすったってか？」

眠そうな口調だったが、男の声には粘りつくような凄味があった。威勢の良かったおかっぱ頭もさすがに絶句したようだ。答えがない。子供は疲れたのか、そこで泣きやんだが、母親のほうは勢いがついた。かさにかかって女を責めたてた。

「どしたい？　なんとか言ったらどうだい。なんにも言えないのなら、悪うございましたと、ここで土下座して謝ってもらおうじゃないか」

「笑わせんじゃないよ」

女がいきなり、片膝立てて座り込んだ。タイトスカートがまくれ上がり、夜目にも白いふとももがあらわになった。

「あたしはちゃんと最初に謝ったんだよ。申し訳ありませんでしたって。それをなんだかんだと難くせつけといて、そのうえ土下座しろって？　できないね、そんなことは。ヘッ、くりからもんもんなんざ、誰でも怖がると思ったら大間違いだよ」

「なんだと」

半裸の男がぐっと身を乗り出した。おかっぱ頭の女は片膝立てた半身を、ぴくりとも動かさない。満座が息を飲んだその瞬間、まあまあ、とひとりの男が割って入った。へらへらと笑いながら、何やら調子のいいことをまくしたて、入れ墨の男の機嫌をとり始めた。

長崎で乗船した時から潮子にまつわりついていた、詐欺師のような男だ。きざなたて縞の三つ揃えを着て、鳥うち帽をかぶった、顔もからだも気味が悪いほど細い男だった。そういえば、このおかっ

ぱ頭の若い女にも、同じようにまとわりついていた。急場を救って、女に気にいられようという魂胆かもしれない。

潮子はそっと立ち上がり、人々の間を縫って船室から抜け出した。階段を上がり、甲板へ出た。ばかな言い争いなど、これ以上見ていたくない。仲裁が入ってうまく収まればそれでいいし、あの入れ墨男が怒り狂い、とんでもないことになるとすれば、よけいに見たくない。

海の夜風は、ねっとりとした湿気を含んでいた。それでもあの息苦しい船底の三等船室に比べれば、はるかに心地いい。潮子は手すりにもたれ、満天の星を見上げた。新鮮な空気を思いきり吸い込み、濁った船室の空気を吐き出した。気分が良くなり、無意識のうちに笑みが湧いてきた。

もともと悪い旅ではないのだ。他の客たちのことはいざ知らず、潮子の場合は行く手に希望が待っている。それにしても、海路を旅すること、もはや二十時間あまり……どこの馬の骨ともわからない連中と一緒に、狭い船室に押し込められていると、こっちの心持ちまで歪んできてしまう。自分も馬の骨なのを忘れて、潮子はそんなことを思った。

小声で好きな歌謡曲を歌ってみた。

窓をあければ　港が見える
　メリケン波止場の　灯が見える

淡谷のり子の『別れのブルース』だ。

ついこのあいだまで、この歌を口ずさみながら人生に絶望していたことが、まるで夢のようだった。

三十分くらいも、そうやって星を見ていただろうか。そろそろ船室に戻ろうと、手すりからからだを離したその時、ひそやかな話し声が聞こえてきた。

潮子は声と反対方向へ、そっと足を踏み出した。ふたりは話しながら、早足でこちらへ近づいてく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。その声が、聞くともなしに耳に入った。潮子は思わず足を止めた。女は、あの気の強いおかっぱ頭、男は、喧嘩の仲裁に入った詐欺師ふうの痩せっぽちに違いない。ちょうど眼の前に救命ボートがあったので、潮子はその陰に身をひそめた。

ふたりの会話を立ち聞きするつもりだったわけではない。あまり急速に足音が近づいてきたので、顔を合わせずにやり過ごそうと思っただけだ。足音がボートのそばまで来た。そのまま行ってくれると思ったのに、ふたりはそこで立ち止まった。何やら言い争いをしている様子だ。

「そりゃないぜ、あんた。おれは身銭切ってあの男をなだめたってのによお、知らんぷりはひどすぎるよ。へたすりゃ、おれはあの男に殴られるかどうかして、あの世行きだったぜ」

「だからありがとって言ってるじゃない」

「そのありがとを、かたちで見せてもらいたいな。それだけのことをしたつもりだぜ」

「知らないね。勝手にしゃしゃり出てきといて、うるさいったらありゃしない」

潮子はボートの陰から出るに出られなくなった。要するに、この男は金を渡すかどうかして入れ墨男をなだめ、あの場から女を首尾よく救いだしてやったらしい。その礼をしろと、女に迫っているのだ。たぶん、目当ては女の肉体(からだ)だろう。

「勝手にしゃしゃり出たって？　言ってくれるじゃないか。さかんに眼で助けてくれって合図送ってたくせによお」

「へえ、あたしが？　おおかたあんたの見間違いだろ。さあ、戻って寝よ。明日は上海(シャンハイ)だもの」

あてつけがましく大アクビをしながら、女が行こうとした。次の瞬間、なにするのよおッという、小さな悲鳴のような声を、女が上げた。その言葉は、途中で不自然に途切れた。ばたばたともがくような音と、くぐもった女の呻き声が聞こえた。

潮子は心配になった。思い切ってボートの陰から飛び出した。振り向いた男の、鉤針のように細く

鋭い眼が、潮子を突き刺すように見た。男は左手で女の口を押さえ、右手に持ったナイフを、女の首筋に当てていた。
「ひ、人を呼ぶわよ！」
潮子は言った。声がかすれた。だが、潮子の警告は逆効果だった。男は乱暴をやめるどころか、その行為を見られたことで、やけになったらしい。
「ちくしょう！　おまえも殺してやる！」
と低い声で言うなり、女のからだをいきなり潮子のほうへ突き飛ばした。女と潮子は、重なりあって倒れた。そこへナイフを振りかざした男が突進してきた。
潮子の背中に胸を押しつけていた女が、くるりとからだの向きを変え、両足を思い切り男のほうへ突き出した。男はその足に蹴られ、反転して倒れた。女はその機を逃さず、すぐさま起き上がった。倒れた男の脇腹を、ハイヒールの爪先で蹴り上げた。ひと声呻いたなりで男が動かないのを見ると、女は大胆にもその後ろ髪を掴み、男の額を床に打ちつけた。
「やめて！」
潮子は女の手を掴んで言った。
「いいのよ、こんないやらしい男」
女はタイトスカートをまくりあげ、男の背に馬乗りになった。
「やめなさいったら！」
潮子は男の背から、女をむりやりひきずりおろした。
「いいじゃないのさあ」
不服そうに、女は潮子を睨み返した。潮子は黙って、うつぶせになったまま動かない男の、腹のあたりを指差した。ナイフを持った男の右手が、そこにあった。ナイフは半分がた、男の腹の中に埋も

れていた。反転して倒れた拍子に、誤って自分の腹を突き刺さしてしまったのだ。
男は微動だにしなかった。おかっぱ頭の女も、さすがに唖然と立ちすくんでいる。潮子は、かがんで男の手首をとった。
「死んでるわ」
よく死人なんか触れるものだ、という眼で、女が潮子を見た。潮子はその眼を無視した。潮子のいた村では、事故や病気でしょっちゅう人が死んでいた。男たちは漁に出て不在のことが多いから、そういう時は若い娘も容赦なく通夜や葬式の準備に駆り出されたものだ。死に顔に化粧をしてやったことも何度かある。気味の悪いものではあったが、そうなじみのないものでもない。
「あたしがやったんじゃない。こいつが悪いんだよ、見てたでしょ、あんた」
押し殺した声で女が言った。
「それはわかってるけど……面倒なことにはなるでしょうね。上海に知り合いはいるんでしょ？」
「いないわ」
挑戦的な口調で女は答えた。
「誰も？」
「誰も」
隠しようのない不安が、その声に現れた。若い女のみそらでひとり上海へ――いずれこの女も、日本ではまともに生きてはいけない事情を抱えているのだろう。自分には一応、男がいることを思うと、潮子はこの女がひどく哀れに思えてきた。精一杯突っ張ってはいるようだが、まだ二十歳そこそこなのだ。
「そっちを持って」
潮子は男の足のほうを指差した。

「え？」
女がけげんそうな顔で聞き返す。
「海に放り込むのよ」
「ああ……」
女はすぐに潮子の意図を理解した。が、潮子が男の肩に手をかけると、ちょっと待って、と手で制した。男の背広の内ポケットに手を入れ、分厚い札入れを取り出した。
「なにしてるのよ」
潮子は咎めた。
「この男、上海へドル買いに行くって言ってたからね、さぞかし……ああ、やっぱりねえ、たんまりおあしを持ってるよ」
女はごっそりと札を抜き出し、財布だけまたポケットに戻した。
「使えるものは使わないと……無駄にしたんじゃ神さまのばちがあたるからね」
はい、とその札の半分ほどを、女が差し出した。
「いらないわよ、そんなもの」
あきれて見ていた潮子は、にべもなく顔をそむけた。女は傷つけられたような表情になり、あらそう、と呟いた。
「わかったよ。三途の川の渡し賃だ」
ぱっと手を上げ、女は札を海に投げた。だがそのうちの何枚かを、投げる前にスカートのポケットへ滑り込ませたのを、潮子は見てとった。
ふたりは男のからだを持ち上げた。痩せた男だったので、どうにか手すりの上へ上げることができた。海のほうへそのからだを押し出すと、わずかな間を置いてドボンと海水の跳ねる音がした。

その音を聞きつけて誰かが来るのではないかと、ふたりはしばし身をすくめていた。だが、船の機関音の他は、何の物音も聞こえなかった。

ナイフが深く突き刺さって栓の役目をしたらしく、床にはさほどの血も流れていない。潮子は懐から手拭いを出し、そこをていねいに拭いた。女もブラウスの袖をむしり取り、それで一緒に拭いた。汚れた布は、死体同様、海に捨てた。

「船室へは別々に戻ったほうがいいわ」

「この借りは返すよ。きれいに返すから」

潮子を睨むようにして、女が言った。その時だった。

空と海が、ふいに白い砂粒でも撒かれたかのように明るくなった。夜が明けたらしい。アッと、女が小さな声を上げた。海上に眼をこらしている。潮子もそのあたりを凝視した。白濁した海が、そこから突然、黄土色に変わっていた。

「揚子江(ヤンツーチャン)……!」

女の口から呟きが洩れた。潮子も心の中で、同じ言葉を思い浮かべていた。話に聞く支那(シナ)の大河が、いま眼の前に横たわっていた。

○

昼過ぎ頃、『上海観光便覧』の写真で見た通りの風景が、潮子の前に出現した。バンドと呼ばれる黄浦江(こうほこう)の外灘(ワイタン)に、コンクリート造りのビル群が建ち並んでいる。いずれも豪壮な西洋建物だ。

あの丸いドーム屋根の、ひときわ装飾的な建物が香港上海銀行、赤いふちどりのある青鈍(あおにび)色のとんがり屋根がキャセイ・ホテル、蘇州(そしゅう)河にかかる橋がガーデンブリッジ、河のたもとに見える茶色のビル——巨大なマントを広げた怪物のように見えるあれが、ブロードウェイ・マンション、赤い縁取りの窓を持つ、灰色のお城のようなのがロシア総領事館……。

『上海観光便覧』で覚えた建物の名称を、潮子はひとつひとつ実物に当てはめていった。

バンドに並ぶビルからして、すでに各国が入り混じっている。上海には世界があるという、どこかで聞いた言葉を、潮子は改めてかみしめた。小さな漁村で生まれ、新宿二丁目の遊廓で人生に絶望していた自分が、外国の土を踏もうとしている。それも、世界じゅうの人々が夢を求めて集まるという、アラビアン・ナイトのような街、上海の土を——。

蜃気楼のように幻想的な上海バンドを前方に見ながら、船は滬山碼頭（ワイサンマートウ）へと入った。近くには、各国の旗をなびかせた軍艦が停泊していた。その間を縫うようにして、ジャンクやサンパン、ランチなどが行き交っている。埠頭（ふとう）には黒いズボンひとつの苦力（クーリー）たちが、上半身を汗と油で光らせながら荷物の間をうごめいていた。彼らを指揮している白人が、英語や支那語らしい言葉を怒鳴り散らしている。

潮子は長い髪を後頭部でまとめ、白いウールのワンピースに着がえていた。トランクと籐（とう）の大型バッグを持って、下船のための列に加わった。するとすぐうしろに、あのおかっぱ頭の女が割り込んできた。

昨夜は気の強い小生意気な女、という印象だったが、化粧気のない顔は、無邪気そうな童顔だった。背丈は潮子と同じくらいで、まあ平均的な高さだったが、彼女の手足のほうが、潮子のそれよりもすんなりと長かった。

紫色の地味なツーピースは、誰かの古着か借り物のように見える。提げているトランクも、角がかなり擦り切れていた。

内地の不況が深刻になるにつれ、女郎屋やカフェーといったいわゆる水商売も、上海や満州へと稼ぎ場所を移してきている。この女も、そういう店で働くために渡ってきたのかもしれない。パスポートのいらない唯一の外国である上海は、日本で食い詰めた男や女が、最後の夢を見にくる街でもあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com